

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書】

都道府県名	栃木県
-------	-----

I 学校の概要 (平成15年4月現在)

学校名	西方町立西方中学校				
学年	1年	2年	3年	特殊学級	教員数
学級数	3	2	3	1	17
生徒数	76	68	81	2	

II 研究の概要

1 研究主題

生徒が主体的に学び、一人一人が確かな学力を身に付けるための学習指導の工夫・改善

2 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

・2年生 ・数学・英語

数学と英語は生徒の理解の状況に差が出やすい教科である。

2年生で研究を進めている理由は、2年生が1クラス的人数が34名と1・3年生(25～27名)に比べ多いこと。また、2年生は中学校の生活にも慣れ、人間関係ができてきていることや、判断力が高まっていることから、習熟度別コースを設定しても、自慢したり、他人を卑下することもないといった実態からである。

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	○テーマ 生徒が主体的に学び、一人一人が確かな学力を身に付けるための学習指導の工夫・改善
	○研究の見通し 学力向上フロンティアスクールに課せられた課題の確認と仮説検証に向けての研究の推進 (仮説)
15年度	(1) 生徒自らが、学習内容と自己の学びの実態を把握し学習に取り組むことができるれば確かな学力を身に付けることができるだろう。 ーメタ認知の重要性ー
	(2) 教師が、創意・工夫し、生徒の個々の能力に応じて、一人一人の能力を伸ばすような授業を展開すれば確かな学力を身に付けることができるだろう。
	○研究の内容・方法
	(1) 全教員による研究に関する共通理解と確認 確かな学力とはどんなことか、個に応じたきめ細かな指導がなぜ求められているのかなど学力向上が求められている裏付けと学力向上フロンティアスクールに課せられた課題は何かをはっきりさせた。 特に確認したことは、生徒一人一人に確かな学力を付けるために全校体制で取り組むということと、4観点全てにおいて向上を図るということである。
	(2) 全校体制による校内研修 ・理論研修 ・研究内容検討 ・意見交換 ・指導体制のあり方 ・習熟の程度に応じた指導、評価のあり方研究
	(3) 個に応じた指導の実施と自己評価カードの工夫・改善・実施
	(4) 仮説検証を目指す授業研究会 ・数学 ・英語
	○指導訪問 ① 7月9日(水) ② 12月18日(木)
	○学習指導研修会 11月20日(木)
	(5) 生徒の実態把握 ・意識調査 ・学力テストの実施
	(6) 保護者のアンケート調査 ・意識調査 ・家庭における生徒の実態
	(7) 家庭学習の充実 ・週末(休日)課題の実施

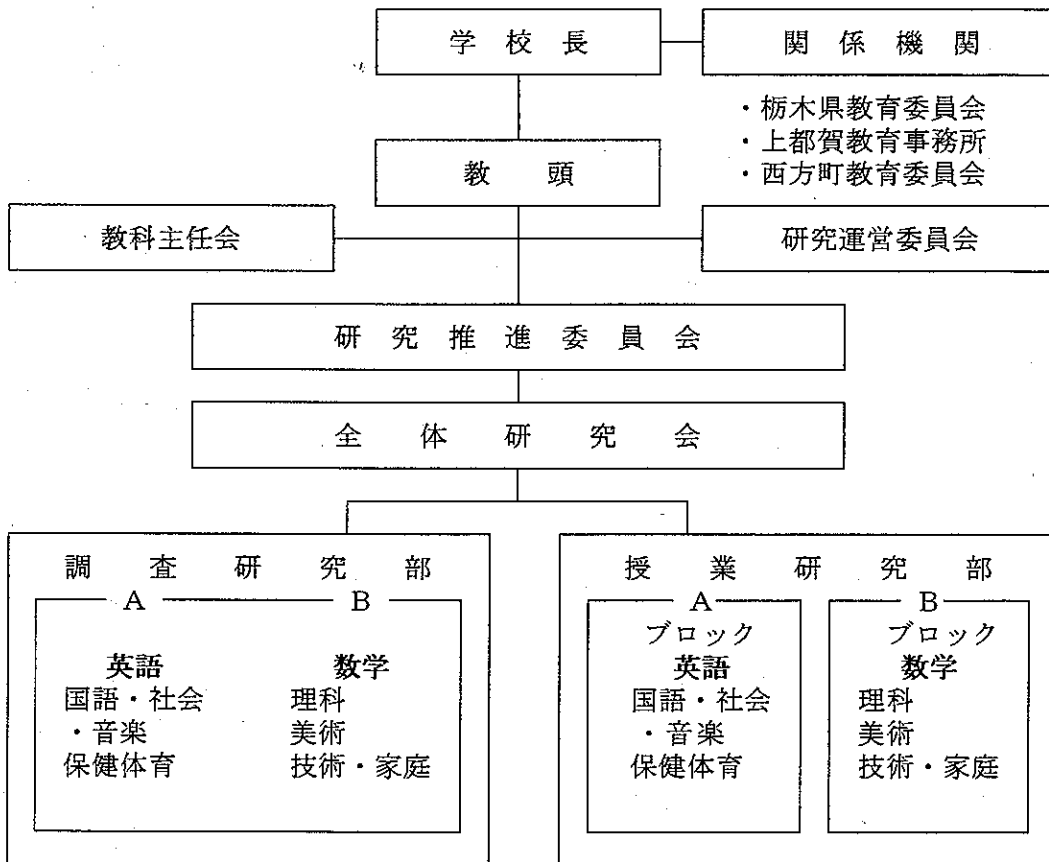
平成16年度

○テーマ
生徒が主体的に学び、一人一人が確かな学力を身に付けるための学習指導の工夫・改善

○研究の見通し
平成15年度に実施した研究内容・成果並びに課題を確認し、成果を深め、広げるようにするとともに、課題について協議し改善を図る。
仮説検証に向けて実践研究を継続して行う。(指導方法の一層の研究・教材の開発)
研究した内容をまとめ、発表する。

○研究の内容・方法
(1) 全校体制による校内研修
・ 研究内容検討 ・ 意見交換 ・ 理論研修 ・ 指導体制のあり方
・ 習熟の程度に応じた指導、評価のあり方研究
(2) 個に応じた指導の工夫・改善・実施と自己評価カードの実施・累積
(3) 仮説検証を目指す授業研究会 ・ 数学 ・ 英語
○指導訪問予定 ① 6月 ② 11月18日(木)
(4) 生徒の実態把握
・ 意識調査 ・ 学力テストの実施
(5) 保護者のアンケート調査
・ 意識調査 ・ 家庭における生徒の実態
(6) 家庭学習の充実
・ 週末(休日)課題の実施
(7) 研究発表会の実施

(3) 研究推進体制



(工夫) 授業研究部において、全教員をAブロック・Bブロックの二つに分け、英語・数学それぞれの授業研究に加わるようにし、より深く研究できるようにした。
また、ブロックの枠を取り払うことで、調査研究部会と授業研究部会の同時開催が可能となり研究に全校体制で取り組みやすいようにした。

III 平成15年度の研究成果及び今後の課題

1 研究成果

ア 学力向上フロンティアスクールに課せられた視点から

- (1) 発展的な学習や補足的な学習など個に応じた指導のための教材開発
 - ・〈数学科〉習熟度別の教材を準備できた。
 - ・〈英語科〉個に応じた指導のための工夫を実施した。
- (2) 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善
 - ・ 全校体制による校内研修の実施により、学力に関する教員の意識改革がなされるとともに、教員の資質が向上した。
 - ・ 仮説検証を目指す授業研究会をとおして、学力の向上に必要なものはどんなことかより明確に洗い出すことができた。
 - ・ 習熟度別学習を効果的に行うための前提条件を洗い出すことができた。
 - ・ 各教科における指導方法の工夫・改善につなげることができた。
- (3) 児童生徒の学力の評価を生かした指導の改善
 - ・ 習熟の程度に応じた指導、評価のあり方について深く研究することができた。
 - ・ 自己ふり返り（自己評価）カードの積極的な活用により、生徒が学習内容と自己の学びの実態を把握できるようになった。

イ 生徒・保護者の実態調査から

- (1) 英語・数学における生徒の意識調査から

【英語】

《 アンケート結果 》 6月34名 / 11月33名

本校では2年生において、今年度より日本人教師のTTによる授業を行っている。一斉指導の中でつまずきのある生徒に対してはTTを活用し、基礎基本を確実に定着させるための個別支援を行ってきた。また10月からは、クラスを習熟度別のコースに分けて、複数の教師でよりきめ細かな指導を進めてきた。

TTの指導を取り入れてから、「2人の先生だとよく教えてもらえる」「すぐに聞ける」などと生徒達にも好評である。特に習熟度別の学習では、一斉授業では授業のスピードについていけなかった生徒が、基礎コースでの学習に対し、「これならやっつけていける」と自信を取り戻したり逆に、今まで多少、物足りなさを感じていた生徒が、発展コースでの学習に意欲的に取り組む様子もみられる。

アンケートの結果から見ると、一斉授業のみだった6月に比べ、11月には「英語の授業がわかるか」の質問には、「わかる」または「だいたいわかる」と肯定的に答える生徒が増えており、あわせて「授業が楽しい」と答える生徒がかなり増えてきている。また、授業の内容についても6月には、英語の歌を歌ったり、インタビューやビンゴなどのゲーム的な活動を好んでいたが、11月には、歌やゲームのみではなく、言語活動そのものを好む傾向が見られる。学習内容によって一斉授業とコース別授業のどちらも行っているが、生徒達にはコース別授業の人気の高い。しかし、学習内容が難しくなってきたこともあり、英語の学力に不安をもつ生徒が多く、基礎コースの希望率が高いといった事実も判明した。

【数学】

本校第2学年の多くの生徒が、数学の授業に意欲的に取り組んでいる。特に、図形領域が好き、得意と答えた生徒が右下の表のように1学期に比べ倍増した。これは「平行と合同」の単元における求角問題などにおいて、クイズ感覚で楽しく答えが求められたことが要因の一つとしてあげられる。しかし、その反面、図形領域の学習になってから発言する生徒が減ってきていることも事実である。また、数学が好きかの質問に対しても「いいえ」と答える生徒が増えた。これは筋道を立てて説明したり、記述する力を必要とする証明について苦手意識を持つ生徒が多いからである。そこで、「図形の性質」の単元では、証明できる力を高めるよう、習熟度別コース学習を効果的に活用し、図形をよく観察させ、生徒の実態に応じて実測などの作業をも取り入れながら、授業を展開したところ授業によ

質問	答え	6月		11月	
		人数	割合	人数	割合
英語は好きか	好き	20	59%	23	70%
	嫌い	14	41%	10	30%
英語は得意か	得意	10	29%	7	21%
	不得意	24	71%	26	79%
英語の授業はわかるか	わかる	18	53%	21	64%
	わからない	16	47%	12	36%
英語の授業は楽しいか	楽しい	25	74%	32	97%
	楽しくない	9	26%	1	3%
コース別授業と一斉授業のどちらが好きか	コース別	27	79%	27	82%
	一斉	7	21%	6	18%

り積極的に取り組み、問題を解決しようとする態度が見受けられた。

(2) 英語・数学における定期テストの結果から(下のグラフ参照)定期テストのため、そのテストごとに問題が異なるし、難易度も当然違ってくるため一概に比較することはできないが、研究主題に基づいて研究を進めることにより次のような成果が得られたのではないかと考えられる。

a 得点が、ひとけたから10点台20点台の生徒がかなり減ったことから、今までなかなか授業についていけず、テスト勉強もあまりできなかった生徒がねばり強く取り組むようになってきたのではないだろうか。

数学は好きか

	はい		いいえ		どちらともいえない		合計	
	人	%	人	%	人	%	人	%
7月	13	39.4	3	9.1	17	51.5	33	100
11月	10	29.4	7	20.6	17	50.0	34	100
12月	10	30.3	6	18.2	17	51.5	33	100

どの領域が好きか

	数と式		図形		数量関係		合計	
	人	%	人	%	人	%	人	%
7月	25	75.8	3	9.1	5	15.2	33	100
11月	22	68.8	8	25.0	2	6.3	32	100
12月	22	66.7	9	27.3	2	6.1	33	100

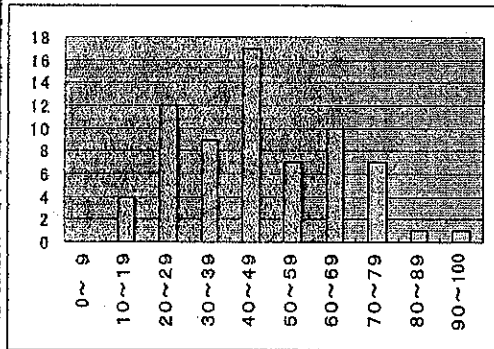
どの領域が得意か

	数と式		図形		数量関係		合計	
	人	%	人	%	人	%	人	%
7月	27	81.8	4	12.1	2	6.1	33	100
11月	22	68.8	9	28.1	1	3.1	32	100
12月	25	73.5	8	23.5	1	2.9	34	100

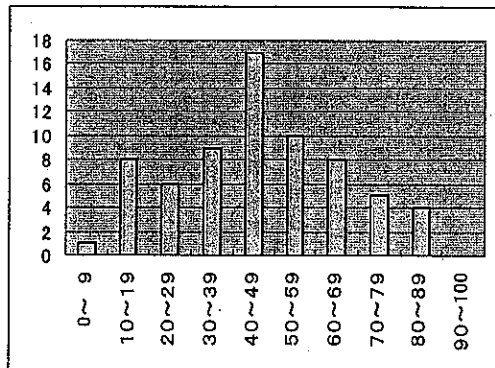
習熟度別授業は良いと思うか

	はい		いいえ		どちらともいえない		合計	
	人	%	人	%	人	%	人	%
7月								
11月	25	73.5	0	0.0	9	26.5	34	100
12月	26	78.8	1	3.0	6	18.2	33	100

【英語】

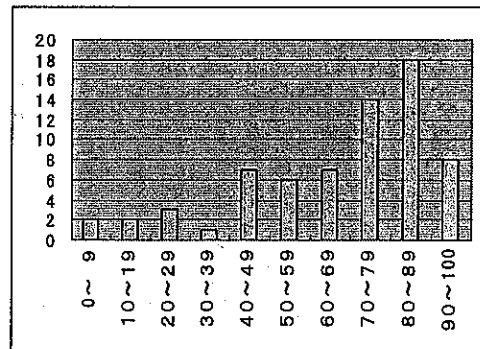


[1学期中間テスト]

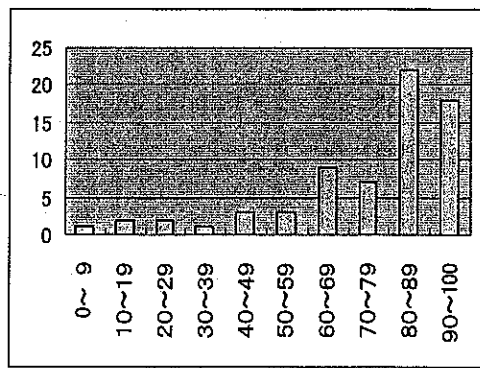


[1学期期末テスト]

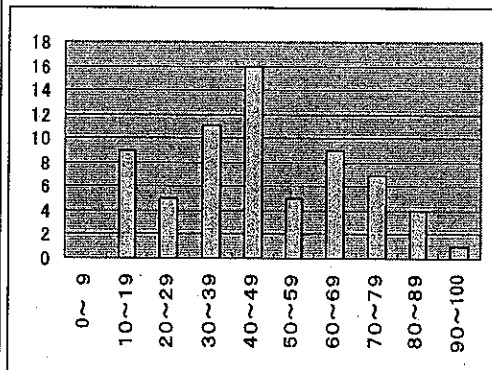
【数学】



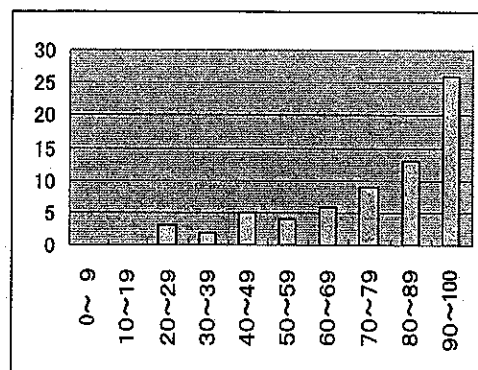
[1学期中間テスト]



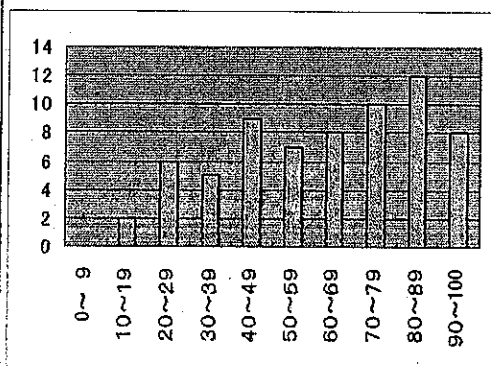
[1学期期末テスト]



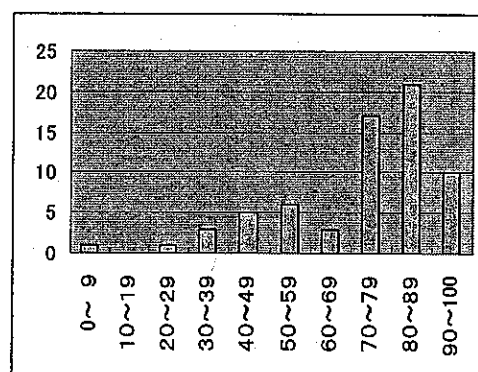
[2学期中間テスト]



[2学期中間テスト]



[2学期期末テスト]



[2学期期末テスト]

- b 80点台から90点台の生徒が増えてきたことから、学習内容をしっかり定着させることができってきたのではないだろうか。
 - c 40点台の生徒が減り、50点台の生徒が増えたことから、少しずつ学力が伸びてきたのではないだろうか。
 - d 4観点全てを網羅することはできないかもしれないが、関心・意欲・態度の面や思考・判断の面でも徐々に力はついてきていると言えるのではないだろうか。
- (3) 自己振り返り(自己評価)カードの記述内容から
- a 英語において「わかったこと、わからなかったこと、これからの課題」の記述の欄に、今日学習した文型や熟語などを書いてまとめる生徒が増えてきた。
 - a 数学において「新たに学習したこと・再確認できたこと」の記述の欄に自分で工夫しポイントとなる図形を描いてまとめる生徒が出てきた。
 - b 数学において「新たに学習したこと・再確認できたこと」の記述の欄に本人の思考の足跡が見えるようなものが出てきた。
 - c 英語・数学とも、わからない点を具体的に記述している生徒が増えてきた。
- (4) 保護者の実態調査から
- a 保護者の理解度や啓発が不十分であることがわかった。
 - ・アンケートへの協力(回収率約41%)が低かった。
 - ・通知を発送したり、保護者会などで話をしたりしたが「現在西方中学校が学力向上フロンティアスクール事業に取り組んでいることをご存知ですか?」の問いに対し認知度は半分以下だった。
 - b 保護者は、TTやコースに分かれて少人数で行う学習について、賛成者が多いことがわかった。
 - (TT賛成=91%, コース別少人数学習賛成=88%)
 - c 少人数指導のクラス編成について、生徒の希望により決定するのを望んでいる親が約半数いるが、「教師側で分ける」や「番号順」など機械的に分ける

のを希望している親も約半数いることがわかった。

- d 家庭での学習の取り組みの様子について、親と子の間に意識のずれがあることがわかった。
 - ・親は、子どもが「宿題はやる」と認識しているのが28%、また、テストでできなかったものをやり直したり、興味のあることは進んで調べるなどの「自主的な取り組みもしている」と認識している親が39%ほどいる。しかし、子どものアンケートからは、自主学習に進んで取り組むに「よくあてはまる」6%「どちらかといえばあてはまる」18%合計24%である。親の見取りと、子どもの実態に差があった。

2 今後の課題

- ・よりきめ細かな指導を実施するため、生徒の実態の把握の仕方を研究する。
(5つの個人差：①学力差②学習時間差③学習適性差④興味関心差⑤生活経験差について確かなとらえ方をするにはどうすればよいか研究する。)
- ・個々の生徒に適したコースの選択をさせるためにはどうしたらよいか研究する。
- ・指導と評価のよりいっそうの一体化を図る。
- ・指導体制づくりと指導計画の見直しをする。
(TTにおけるSTの効果的な在り方、習熟の程度に応じた学習のよさの明確化等)

IV 学力把握のための学校としての取り組み

- 1 自己ふり返り（自己評価）カードへの記述内容の分析
生徒の学習への取り組み状況を把握するとともに、生徒の学習意欲の喚起につなげる。また、仮説検証の資料とする。内容は、今日の学習への取り組みの評価を4段階または3段階でするとともに、「わかったこと、わからなかったこと、これからの課題」等を記述する。生徒は、授業終末時に記述し、教科担任は週ごと、または、小単元ごとにチェックする。
- 2 年5回の定期テストの実施
学習内容の理解度や思考状況等を客観的に判断する。そして、結果が不十分なところは、もう1度説明し、やり直しをして定着を図る。1学期に2回、2学期に2回、3学期に1回全校一斉に実施する。
- 3 年1回学力テストの実施
学習内容の理解度や思考状況等を客観的に判断する。全校一斉に実施する。
- 4 生徒・保護者の意識調査
年2回6月と10月に実施。教科に対する意識や指導方法に対する意識を調べ、次の指導に生かす。また、家庭学習の実態等を把握し次の指導に生かす。

V フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- 1 平成15年度
 - ア 11月20日（木）本校を会場として、学習指導研修会（上都賀教育事務所主催）実施。上都賀南部地区の小中学校を中心に、研究授業を含め本校の取り組み状況を説明し、研究協議会を実施することにより他校への普及に努めた。
 - イ 11月6日（木）・2月12日（木）上都賀教育事務所主催による学力向上フロンティア研究協議会に参加し、上都賀地区における研究校同士で情報交換を進めた。
 - ウ 西方町教育会編集発刊の「西方の教育」に研究内容及び資料等を掲載し普及に努めた。
 - エ 西方・粟野教務主任会において研究の概要等を発表し普及に努めた。
- 2 平成16年度
 - ア 研究成果普及のためのホームページの作成予定
 - イ 11月18日（木）公開研究発表会予定

◇ 次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校

【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上

【指導体制】 少人数指導 T. Tによる指導
 その他

【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無